

修士論文概要

障害児の学校教育のアクセシビリティをめぐって
～ガーナ共和国ボルタ州における事例研究～

池田 麻衣

1. 研究の目的と方法

本研究は、障害と開発の分野の研究である。障害児の保護者や学校教員をはじめとする障害児に関わる人々の障害児の捉え方、障害児が学校に行くことに関する関心や考え方を明らかにすることを目的とした。障害児を取り巻く人々の障害の理解や、障害児における学校教育への価値観に焦点を当てた研究である。

国際的な開発において、教育機会の保障が重要課題であり、教育を受けることは全ての人が持つ権利であると認識されている。各国においては初等教育の完全普及に向けての取り組みがなされ、初等教育への就学率は確実に改善されつつある。しかし、初等教育の普及は未だ完全ではない。その要因は、教育機会に脆弱であるとされる人々への教育機会の保障が行き届いていないことである。障害児については、教育機会に最も脆弱であり、初等教育の完全普及に向けては障害児を包摂することが重要課題であることが明らかになった。それにより、初等教育の完全普及は基本的人権、子どもの権利、障害者の権利と言う人権の視点から取り組むべき重要な課題であることが認識されている。

ガーナにおいても、国際的な開発における教育分野の潮流を受け、教育は万人の「権利」であることが明言されている。Education For All や Sustainable Development Goals の目標を基盤とした教育政策が打ち出されている。筆者は青年海外協力隊に参加し、ガーナにおいて2年間、障害児に関わった経験がある。ガーナにおける活動期間中、筆者が経験したのは、教育政策と現場の乖離であった。ガーナ政府からは、Inclusive Education Policy として教育政策が挙げられている。しかし、実際には学校に行くことができていない障害児が多く存在し、それはガーナの教育政策における一つの課題であることが示唆された。ガーナにおける障害児の学校教育へのアクセスの現状から、「なぜ、ある障害児は就学できており、機能的な障害が同等又は軽度の障害でも就学できていない障害児がいるのか」という問題意識が出発点となっている。

主な研究方法は、文献調査と現地調査とした。まず、先行研究から開発途上国における教育機会へのアクセスに関する調査を行い、課題を明らかにした。そして、一般的な学校の役割に関する研究から、本研究においてなぜ「学校教育」に焦点を当てるのかを明らかにした。また、ガーナ政府発行の各資料や報告書を用いて、ガーナにおける教育政策に関する基本情報を整理した。それらを踏まえた上で、2018年6月3日～6月27日の期間で、ガーナ国ボルタ州にて現地調査を実施した。現地調査では、同地域において障害児支援の活動を行う団体、Kekeli Foundation の協力を得た。同団体が支援する障害児とその家族、就学児の通う

学校の教員や責任者へのインタビュー調査を主な方法とした。訪問先での対話から、家庭状況をはじめ、障害児の捉え方や、学校に通う事に関する考えを情報として収集した。また、学校生活場面から、実際に障害児がどのように学校生活を送るのかを観察した。

本研究では、障害を捉えるためのモデルとして、障害の社会モデル、障害の家族モデルを採用し、開発の枠組みとを繋げるために、ケイパビリティ・アプローチを採用した。これら3つを本研究の分析枠組みとして、前述の研究結果を分析し、結論付けている。

2. 論文の構成

第1章 はじめに

- 第1節 研究背景
- 第2節 問題の所在
- 第3節 研究の目的
- 第4節 研究の方法
- 第5節 論文の構成

第2章 研究の方法論と分析の枠組み

- 第1節 研究の方法論：社会構築主義
- 第2節 本研究における分析の枠組み
- 第3節 小括：複合的な分析の枠組みを用いた研究

第3章 障害をめぐる学校の意義と課題

- 第1節 学校の役割
- 第2節 障害をめぐる学校教育の課題
- 第3節 障害児の学校教育のアクセシビリティに影響しうる障害児の捉え
- 第4節 小括：学校における教育に焦点を置く研究

第4章 ガーナにおける障害児の教育機会のアクセシビリティの実際

- 第1節 ガーナにおける学校教育の実態
- 第2節 調査概要
- 第3節 調査結果と分析
- 第4節 障害児の学校教育のアクセシビリティをめぐる議論
- 第5節 小括：人々の障害の理解や意識への視点

第5章 結論と今後の展望

第1節 結論：障害児の学校教育のアクセシビリティを考えるうえで配慮したい視点

第2節 今後の展望：障害児の学校教育の

アクセシビリティ向上に向けて考えられる取り組み

3. 論文の概要

本論文は5つの章で構成される。

第1章では、研究の背景と目的、研究方法および論文の構成を明確にした。

第2章では、本研究の方法論と研究の分析枠組みを明示した。

本研究で採用した、障害の社会モデル、障害の家族モデル、アマルティア・センとマーサ・ヌスバウムのケイパビリティ・アプローチについてそれぞれの概要を整理した。そして、本研究においてこれらの枠組みを採用する妥当性を示した。障害児の学校教育へのアクセシビリティをめぐって、人々の障害の理解や障害児における学校教育の価値観がどのように影響しうるのか、と言う点を複合的な枠組みで分析することを明示した。

第3章では、「障害をめぐる学校の意義と課題」と題し、先行研究から学校の役割を概観し、検討した。

本研究における学校の役割を、①子どもの成長・発達の間、②地域での生活基盤の間、③社会的排除を防ぐ間、と考えることを述べた。そのうえで、なぜ本研究において「学校教育」と表現するのか、その妥当性を提示した。

第4章では、「ガーナにおける障害児の学校教育のアクセシビリティの実際」と題し、ガーナでの現地調査の結果を分析した。

障害児の学校教育のアクセシビリティをめぐり、人々の障害の理解がどのように学校教育の価値観に影響するのか、人々の障害の理解は人々のどのような背景、または環境により変化しうるのかと言う点について、①保護者の考え方、②近隣の障害児の存在、③母親と教員の関係性、④障害の捉え方と個人としての理解、⑤個人の機能障害の程度という5つの視点からの議論を試みた。

1つ目の論点は、障害児の就学には、保護者の考え方の重要性である。保護者がどのように障害を捉え、就学をどのように考えるかが大きく影響することが考えられる。保護者自身が中途退学をした経験のある場合は、就学に対する意識が低い傾向にあることが示唆された。就学経験のみでなく、障害児の成長発達の遅れや他児との差異により、障害を否定的に捉える傾向が見られた。それにより、障害児の学校教育への価値観が低下している可能性が示唆された。つまり、保護者の経験が障害の捉え方や就学への意識に影響していることが考えられる。人々の理解と学校教育に向ける価値観と言う点については、障害児を「個人」として捉えていることの重要性を述べた。

2つ目の論点は、近隣に生活する障害児の存在と家族間の関係の重要性である。就学し

ている障害児を見ると、保護者の障害の捉え方は決して否定的ではなく、就学に対する意識も積極的であった。就学している障害児の多くは、近隣に同年代の障害児が生活していた。このことより、近隣に障害児が生活しており、家族間でのコミュニケーションが取れることにより、障害の捉え方に変化が起こりうることを述べた。

3つ目の論点は、保護者と教員の関係性である。保護者と教員の関係性が、学校に留まらず地域における関係性へも及んでいることが影響する。つまり、就学以前より知り得た間柄ということである。この関係性は、「障害児」という認識ではなく「XXさんの子ども」という一人の子どもとしての認識になる。この関係性が保護者にとって安心感になること、そして、就学に向けての意識を高められることが示唆された。

4つ目の論点は、障害児を「こども」として捉えることの重要性である。上述の4点はつまり、機能障害にかかわらず、障害児を他の子ども同様の「こども」として捉えていることが、学校に通わせるか、受け入れるかという選択に影響しているのではないかという事である。これは、障害をどのように捉えているかという点も影響する。「障害児」として特別な見方をするのではなく、機能障害があったとして、もその子を「こども」つまり、一個人として捉えることが重要である。そして、それは上述の3点、保護者同士や保護者と教員の関係性も影響していることが考えられることを述べた。

5つ目の論点は、障害の捉え方や、就学への考え方の影響の他、機能障害の程度の影響も重要な点である。重度の機能障害のある子どもへの対応ができる環境が整っていないことも事実であり、それらの整備は必要不可欠であることを述べた。そのうえで、必要な環境整備に至るにも、障害児が地域の学校に就学することを念頭に置く必要があることを述べた。

第5章では、結論として学校教育のアクセシビリティを考えるうえで配慮したい点を挙げ、学校教育のアクセシビリティの向上に向けての展望と課題を述べた。

まず、障害児の学校教育のアクセシビリティについて考える際に配慮したい点として、①保護者の経験が就学に対する意識に影響する可能性、②障害児の家族間でのコミュニケーション、③地域社会における保護者と教員の関係、④障害児を「個人」と捉えることによる実質的な就学の可能性、の4点を結論として挙げた。これらが、学校教育のアクセシビリティをめぐる課題には含まれており、ここにも注目する必要がある。障害児の学校教育のアクセシビリティをめぐることは、どのような背景のもと障害児を取り巻く人々の障害児の捉え方があるのか、それがどのように就学に対する意識に影響しているのかを知ること、実際に就学を決定する保護者の考え方を積極的にする取り組みへと繋がるだろう。

最後に、学校教育のアクセシビリティの向上に向けた取り組みの展望として、地域における人々の関係性の活用と、家族間のコミュニケーションを図る機会を設ける取り組みの2点を挙げた。